

# 「フロツクコート」の行方（I）

酒 井 英 行

内田百閒の「フロツクコート」（『百鬼園隨筆』三笠書房、昭8・10）は、『大阪朝日新聞』（昭8・3・19）の「日曜のページ」に掲載された作品である。

この日の「日曜のページ」の企画は、陸・海軍（の学校）に関する小説の特集である。先ず、「青年将校精悍物語」のタイトルのもとに、福永恭助の「練習艦候補生室」と、桜井忠温の「陽気な少尉」が載っている。福永恭助は海軍兵学校出身の文筆家、桜井忠温は陸軍士官学校出身の文筆家である。編集意図は明白であろう。海軍兵学校出身の福永に、海軍の「青年将校」の物語を、陸軍士官学校出身の桜井に、陸軍の「青年将校」の物語を依頼したものと考えられる。

ところで、「精悍」物語を、という依頼はあったであろうか。福永の描く「候補生」たち、桜井の描く「少尉」は、「青年」であるがゆえの「稚氣」こそ持ち合わせてはいるが、「精悍」というイメージにはほど遠いのである。例えば、福永の「練習艦候補生室」の食事風景は次のようである。

「おい、食事はちやんと残してあるだらうな？」

(中略)

「あゝ、ちやんと残しといたよ。」とさつきカレーのお代りをした候補生がお鍋の蓋をとつて答へます。

「ほうれ、たつぷりあるだらう、カレーが——。」

たつぷりある理わけです。足りなくなつた分は如才なく、お湯を注いで掻き廻して置いたのですから。(中略)「よくも水を割りやがつたな。さあ堪忍ならぬ。」

お先きに失敬した連中とこゝに大立廻りがはじまるといふ、いやもう大変な賑やかさであります。

仲間意識、若さのなせる悪戯、乱暴。どう見ても、どたばた喜劇でしかない。桜井の作品の「陽気な少尉」という題名と合わせて考えてみて、編集者は、「青年将校」の〈滑稽〉物語、気楽に読める面白い読み物を書いてほしい、という依頼をしたのだと思われる。タイトルの〈精悍〉は反語的に使われているのである。若き丸出しの喜劇に〈精悍〉という題名を被せることによって、笑いが増幅されているのである。

福永の海軍の物語、桜井の陸軍の物語を統合した作品が百間の「フロックコート」である、と言えよう。編集者は、陸軍海軍に関する特集を組むに当たって、かつて陸軍士官学校教授、海軍機関学校兼務教官、陸軍砲工学校教授であつた百間には、陸・海軍両方に関する作品の執筆を依頼したであろう。「フロックコート」は、士官学校と兵学校のタイトルのもとに掲載されていて、その本文に割り込ませる形で、陸軍士官学校正門と海軍兵学校大講堂の写真が載せられているのである。

\*

「フロックコート」は（その一）と（その二）から構成されているが、それぞれは次のように書き起こされているのである。

大正五年十二月八日の夜、私は漱石山房の泊まり番にあたって病篤き先生の隣りの部屋に、当番のお医者さんと炉をかねて、不眠の一夜を明かした。

（中略）

九日の薄暮に、先生は亡くなられた。門下の者が交替で、先生の看病をした当番は、私まで来て、終つたのである。（その一）

大地震の翌年の春、私は陸軍士官学校から江田島に出張を命ぜられて、海軍兵学校と機関学校とを視察することになった。

海軍機関学校は地震の火事で焼けてしまふまで、横須賀にあつたので、私は毎週一回、金曜日に兼務として東京から横須賀まで出かけてゐた。（その二）

現実の事実にどれくらい忠実な記述であろうか。それを検証してみよう。

先ず、（その一）。荒正人・著、小田切秀雄・監修『増補改訂 漱石研究年表』（集英社、昭59・6）の大正五年十二月八日と九日の一部を抜き出してみよう。

（十二月八日）午後十時頃から昏々と眠る。次第に絶望の状態に陥る。真鍋嘉一郎は、絶望を伝える。（中略）不安な一夜を明かす。内田百閒付き添う。カンフルもほとんど反応ない。

(十二月九日) 午前二時頃、真鍋嘉一郎、最後の宣告を下し、知らせるべき親戚・知人に通知せよと云う。(中略)  
午後六時四十五分永眠。

(その一)の書き起こし部分は、このような歴史的事実から一步も踏みだしてはいない。漱石の病状から見て、百閒が「不眠の一夜を明かした」というのも事実であつただろう。大状況、細部ともに現実の事実<sub>に</sub>忠実なのである。  
次に、(その二)。「百鬼園日記帖」(三笠書房、昭10・4)からその一節を抜き出してみよう。

(大正八年二月) 七日。機関学校へ行く。もう一日寝てゐた方がよいと思ふのを少し無理して起きた感があるので心配したけれども少しも触らなかつた。一時二十分の汽車で横須賀を帰る。

(大正八年二月) 十四日金曜。横須賀へ行く。

(その二)の「毎週一回、金曜に」横須賀の海軍機関学校に行つたという記述が事実どおりであることが分かるであろう。(その二)で描かれる出来事と直接的には関わらないディテールにおいて、現実の事実を忠実になぞっているのである。しかし、(その二)の大枠、「陸軍士官学校」から江田島に出張を命ぜられた、というのはどうであろうか。「陸軍士官学校」は、年譜的事実からすれば、「陸軍砲工学校」とあるべきである。「フロックコート」からおよそ二十八年後に執筆した「山むらさきに」(「けぶりか浪か」新潮社、昭37・7)では、年譜的事実どおり、「陸軍砲工学校」と記しているのである。「フロックコート」執筆時の記憶違いではあるまい。「陸軍士官学校」での出来事を描いた、つまり、「陸軍士官学校」の教官である「私」を描いた(その一)を受けての記述であるから、話を単純化するために意識的に改変したのであろう。  
(その一)、(その二)の書き起こしの部分については次のように言えるであろう。かなり忠実に現実の事実に乗っかりながら、創作上必要があれば、自在に事実を改変している、と。

「フロックコート」の主部の虚実はどうであろうか。

先ず、(その一)を検証してみよう。

その九日の朝は、当時私の奉職してゐた陸軍士官学校の、第卅期新入生徒入校式があるはずになつてゐた。さういふ儀式の八釜しい学校ではあるし、また先生の容態が一寸その式に行つて来る位の間なら、急変もなからうと云ふお医者と言葉を頼みにして、早稲田南町の先生の家から、十分もかからない近くにある士官学校に出かけて行つた。

内田百閒は、本当に、大正五年十二月九日の朝、陸軍士官学校の入校式に行つたのであろうか。「漱石先生臨終記」(『鶴』三笠書房、昭10・2)は、漱石の臨終前後を描いた作品のひとつである。

大正五年の冬、十二月に入つてから先生の病勢は危迫を報ぜられた。門下の者が交替で、泊り番をきめて先生を看病をした順番が、幾度目かに私に廻つて、八日の夜は病室に隣つた部屋の炉辺に、不眠の一夜を明かした。

(中略)

さうして、障子越しの硝子戸の向うに、重苦しい暁の色が射して来た。

お午過ぎに、病室から慌しく走つて来る足音がして、「早く、お嬢さんを、俵屋をやつて、さうだ女子大学の女学校へお迎へにやるんだ」と云つた。

この作品では、十二月九日の「暁」から「お午過ぎ」までの時間は空白である。この書かれざる空白の時間に、「早稲田南町の先生の家から、十分もかからない近くにある士官学校」の入校式に行つて来ることは可能であらう。しかし、百閒が、「早く、お嬢さんを、……」という声を聞いたのは、「お午過ぎ」ではないのだ。十二月九日は土曜日であるから、「お午過ぎ」に、漱石の娘を迎えにやるということは、先ずありえないだらう。百閒が、「早く、お嬢さんを、……」という声を聞いたのは、もっと早い時間であつたはずである。「早く、お嬢さんを、……」の声はいつごろ発せられたのであろうか。

小宮豊隆は、この前後の模様を次のように伝えている。

九日は土曜である。子供たちの学校をどうしようかと、真鍋に相談すると、土曜は半日だから構はないだらうといふ。それで子供たちは、みんな学校へ出された。然しそのあとで容態がどうも思はしくなくなつた。午まで持つかどうか分からないといふので、すぐ子供たちの所へ、それぞれ迎ひが出されたが、その車がなかなか帰つて来なかつた。其所へ長女と一緒に学校へ行つてみた二女の恒子が、心配で学校にゐる気がしなかつたといふので帰つて来る。近所の早稲田小学へ行つてゐた四女の愛子も帰つて来る。すぐ病室にやると、愛子がいきなり、わつと泣き出した。それを鏡子がたしなめると、漱石は眼を瞑つたまま、「いいよ、泣いてもいいよ」と言つたのださうである。長女の筆子を女子大学の附属まで迎ひに行つた車は、途中で転覆したため、帰つて来るのがひどく遅れたが、それでも筆子に怪我もなく、そのままその近くの車で帰つて来た。そのうち長男の純一、次男の伸六も帰つて来る。みんな揃つて午

ごろ病室に這入つて行つた。(『夏日漱石』岩波書店、昭13・7)

小宮の言説を素直にたどれば、子供たちのところへ「迎ひが出された」時刻は、午前十一時頃ということになるであろう。だとすれば、入校式に行つてきて、その後で、「早く、お嬢さんを、……」という声を聞くといいことは先ず不可能であろう。しかし、九日の朝、入校式に行つていない、と断定することはまだ出来ない。ここでは、百閒が、九日の午前十一時頃、漱石山房にいたということだけ確認しておこう。

『増補改訂 漱石研究年表』は、十二月九日の午前中の状況を次のように記している。

七時、子供たち(を)学校へ行かせるかどうか迷つたので、真鍋嘉一郎に尋ねると、土曜で半日だから、行つてもよいでしょうと云われ出かける。鏡、病室に戻り、顔色、全く生気を失つているので驚く。病室の外に出て、真鍋嘉一郎に、「先生、病人はもうだめでございませぬ」と聞くと、「ええもうだめです」と答える。中村是公に急報する。

内田百閒は、何枚も電報頼信紙に、危篤の電文を記す。寺田寅彦の代りに妻寛子来る。十一時、食塩注射六百グラムする。

内田百閒が、漱石山房で、「危篤の電文」を記していたのは何時頃であろうか。午前七時から十一時の間、と理解するの  
が、最大限に幅を持たせた無難な解釈ではあろう。しかし、下限の時刻を二時間程度前に想定することは、『漱石研究年表』  
の理解として許される範囲の解釈ではなからうか。午前九時頃、百閒は漱石山房にいたのだ、と私は考える。八日の「泊  
まり番」で「不眠の一夜を明かし」、引き続き漱石山房に止まり、午前九時頃、「危篤の電文」を記し、そして、午前十一  
時頃、「早く、お嬢さんを、……」の声を聞いたのだ。つまり、百閒は、十二月九日の午前中には、陸軍士官学校の入校式  
に行つてはいないのだ。

そもそも、大正五年十二月九日に、陸軍士官学校の入校式はあつたのであろうか。『百鬼園日記帖』、『続百鬼園日記帖』  
(三笠書房、昭11・2)の入校式関係の記事を見てみよう。

遅くなつたから学校の一時からの入校式へ車で行く(大正六年十二月一日)

士官学校の新入生徒の入校式。(大正八年十二月一日)

『百鬼園日記帖』の記述は大正六年七月二十八日から開始されているので、問題にしている大正五年の入校式が何時行  
われたかは窺い知ることが出来ない。また、大正七年の記述は九月十五日で終わっているのです、この年の入校式の日時も  
分からない。しかし、大正六年と八年については、〈十二月一日〉と明記されているのである。陸軍士官学校の入校式は、  
毎年、〈十二月一日〉に行われていた、と考えるのが自然であらう。しかも、〈朝〉ではなくて、〈午後一時〉から。

こうなるであらう。大正五年の陸軍士官学校の入校式は十二月一日の午後一時から既に行われていたのだから九日の午

前中にそれに行くことはありえない、九日の午前中はずっと漱石山房にいたのだ、と。

「病篤き」漱石を後にして、十二月九日の朝、陸軍士官学校の入校式に行ったという、(その一)の枠組みは、完璧な虚構だったのである。

次に、(その二)を検証してみよう。

一体、軍隊の学校はどこでも出入りが八釜しくて、一一門番が控へてゐる。初めて這入つて行くものは、自分の身分や用件をいなければ、通してくれないものなのである。それを私は承知してゐるから、今日も旅先と雖もフロツクコートに山高帽子で威容を整へ、正門から名乗りを上げて乗り込む覚悟であつたところが、船の著いたのは、塵芥捨て場のやうな石垣の間なのである。

この文章は論理的に運ばれてゐるのであるうか。へフロツクコートに山高帽子の出で立ちに必然性があるであろうか。「軍隊の学校」では「出入り」が嚴重であつたとしても、「身分や用件」を言ひさえすれば、門番は通してくれるのである。へフロツクコート・へ山高帽子を着用しなくても、「身分や用件」を言ひさえすれば通れるのである。東京から遙々、へフロツクコート・へ山高帽子を着用(あるいは、携帯)してこなければならぬ必然性はどこにもないのだ。「表向き名目」がどうであれ、「去年の夏まで同僚だつた先生方にもあひ、またそれまで教へてゐた生徒達の顔も見たかつた」といった私的な訪問に、へフロツクコートに山高帽子という嚴重しい出で立ちでやつて来たとは思われない。

(大正八年二月二日) 明日士官学校の新しい校長に伺候式といふのがある由、フロツクコートが質に入つてゐて出せないから曾根のを借りる事にして、しかし私が行つてゐては又時間をつぶす故町子をやる。(『百鬼園日記帖』)

(大正八年五月六日) 八日のフロツクコートをどうしようかと思つた。質を出す十八円の分別がなかつた。九日の

横須賀へ行く旅費のあてもなかった。(同)

大正八年の時点で、百間の貧窮はここまで来ていたのである。百間の「フロックコート」は、質に入っているのが常態であったのだ。「大地震」後、海軍機関学校が江田島に移ったことで、「兼務はひとりでお止めになった」。「地震の為に月月八十五円を奪はれたのである。後がうまく行く筈がない。忽ちその結果が現はれて行き詰まり、面白くない事になった」(「山むらさきに」)のである。このような時に、「フロックコート」が百間の手元にあつたとは考えられない。「フロックコート」を要しない旅のために、「質を出す」金の工面に奔走するはずがない。

江田島の兵学校で転ぶ話を内包する作品は、「フロックコート」の他にもある。「門衛」(「凸凹道」三笠書房、昭10・10)、「山むらさきに」、「ノコリノコらず」(『日没閉門』新潮社、昭46・4)などがそれである。「フロックコート」に山高帽子で出掛けた、と書いている作品はひとつもない。「フロックコート」に山高帽子が事実であつたならば、これらの作品のどれかでは、そのことに触れるであろう。

内田百間は、江田島への出張には、「フロックコート」に山高帽子で行ってはいない。以上の推察によってこのように断定してよいであろう。

(その二)の「私」を象徴する出で立ちがフィクションであつたのである。

(その一)の主部の枠組み、(その二)の主部の生命線、どちらも虚構である。(その一)、(その二)の主部で描かれている他の事柄も事実として読む必要はまったくくない。作品の導入部、つまり、(その一)の書き起こしの部分こそ、現実の事実をなぞっているが、その後は、虚構を駆使しているのである。

\*

(その一)の「私」は厳めしさを強いられているのである。陸軍士官学校の体制によって、(フロックコート)に(山高帽子)の出で立ちを強いられているのである。生徒の硬直によって、「厳肅なる歩み」をさせられているのである。

入口から教壇に向かふ通路の両側に、気をつけを喰つた生徒達は石の如く硬直し、何年来さうして起つてゐるのかの様に、静まり返つてゐた。

生徒達は、白ら白らと真ともを向いて、何処を眺めてゐるのだから解らないけれど、何か知ら一点を、氣絶する一寸前の如くに見据ゑてゐるのである。

あたかもロボットであるかのような異常なこわばり。生徒のこのこわばりが「私」に「厳肅なる歩み」を強いているのである。硬直した生徒との釣り合いを保つために、心ならずも、陸軍士官学校の教官という役割を遂行しているのである。「静静と教壇に向かつて行つた」、「厳肅なる歩みを進めた」、「その前をすまして通り過ぎ」——「私」はロボットの歩みを進めているのである。

厳めしい服装での「厳肅なる歩み」が、仰向けに引つ繰り返るといふ失策のおかしさを増幅させていることは間違いない。しかし、作者は、失策のおかしさを増幅させるために、「私」に「厳肅なる歩み」をさせているわけではない。「私」に「厳肅なる歩み」をさせているものは、状況(士官学校の体質)なのである。そのように読めるように描かれているのだ。仰向けに引つ繰り返らせるために、厳めしく歩ませているわけではない。表現の生理(笑いの表出というねらい)によって引つ繰り返らされたのでもない。「私」が作者の操り人形に墮していない自然性が(その一)にはあるのだ。状況から強制された(わざとらしさのない)、硬直した「厳肅なる歩み」の後の転倒であるがゆえに、自然なおかしさが表出され

ているのである。

しかし、その拍子に、昨夜からの、一睡もしなかつた悲痛な気持を、どうなりかうなり人前だけ包んでゐた薄皮が破れて、何だかわけも解らず、わあつと泣き出しさうな滅茶苦茶な気持になりかけたところを、やつと我慢して起き上がつて見たら、前列の端の生徒の足もとに、変な黒いものが転がつてゐるのが私の山高帽子である。

「プロックコート」は漱石の回想記ではない。「一睡もしなかつた悲痛な気持」のために転倒した、という意味付けはされていないのである。十二月九日の午前中の出来事という虚構は、転倒による動転の激しさを仮構するために用いられていたのである。「不眠の一夜を明かした」後、「先生の容態が一寸その式に行つて来る位の間なら、急変もなからうと云ふお医者と言葉を頼みにして」やつて来た入校式。不安で落ち着かない切迫した状況が転倒による動転の激しさを引き起こしているのである。

「何だかわけも解らず、わあつと泣き出しさうな滅茶苦茶な気持」を伴うほどの「私」の失策はいかに遇されたのであろうか。生徒たちは、「丸で何事もなかつたやうに澄まし返つて、つつばらかつたまま、くすりともいはない」のである。笑わない生徒たちの存在によつて、「私」の恥ずかしさは増幅されていくのである。威厳を損なう無様な失策、「しくじりの引込みがつかない」無様さが描かれているのである。

しかし、(その一)のテーマは「私」の無様さに置かれていであろうか。「私」の格好の悪さが内包しているおかしさがテーマであらうか。

「私」は「病篤き先生」の側に寄り添っていたのだ。しかし、藁にもすがる思いで、「一寸その式に行つて来る位の間なら、急変もなからう」という医者の言葉を頼みにして、側を離れざるをえない状況に置かれていたのである。「さういふ儀式の八釜しい学校」では、入校式に出ないわけにはいかないのである。その意味で、陸軍士官学校の体質が「私」を「病

篤き先生」の側から引き離れたのだ、と言えよう。

軍隊では、廊下は野天と心得るのださうで、苟も一步部屋を出る時には威容をととのへるために、必ず帽子をかぶつて歩くのである。

「廊下は野天と心得る」という規則は、「軍隊」における単なる約束事に過ぎないのである。空疎な規則でしかないのだ。生徒のいる教室に入れば脱いで置いておくだけのへ山高帽子を空疎な規則のために被つて歩くのである。「苟も一步く必ず」、例外を一切許さない硬直した有り様で、その空疎な規則が絶対化されているのである。へフロツクコートへへ山高帽子へへの出で立ちには、そもそも、教官が教室で教えるために必要なものではない。物々しさを至上価値とする頑迷固陋な体質があるのだ。教官に敵めしい服装をさせることで權威を持たせて生徒を威圧しようとしているのである。厳然たる上下關係を生徒に押しつけ、絶対的な服従を生徒に強いる、それが陸軍士官学校の体質なのである。さりげない言い回しのなかで、陸軍士官学校の權威主義、形式主義を表出しているのである。

「私」は陸軍士官学校の教官ではあるが、硬直した權威主義、形式主義に陥つてゐるわけではない。「さういふ儀式の八釜しい学校ではあるし」、「廊下は野天と心得るのださうで」という言い回しには、陸軍士官学校の權威主義、形式主義への違和感、嫌悪感が表明されているのである。陸軍士官学校の体質を、御大層な方針で、御苦労なことにも勿体振つて、と皮肉り、自己を部外者、傍觀者の位置に置いてゐるのだ。「私」が教室に近付いただけで、「当番の生徒が烈しい声を出して、気をつきの号令をかけた」のである。生徒は異常なまでに完璧に規律を守り、物々しいのだ。「私」は傍觀者の立場で、「その教室に近づいただけで、あわてなくともよささうなものだけれど」、と距離を置いて見ているのである。

「気をつけを喰つ」て硬直している生徒たちの前で、「フロツクコートの裾を散らかしたまま」、へ山高帽子を飛ばして仰向けに引つ繰り返つたのである。「前列の端の生徒の足もと」に転がっている帽子を生徒は拾つてくれようともしないし、

「私」が近付いて行つても、生徒は「見向きもしない」のである。「氣をつけの号令」に忠実に従つてゐるのである。異常なまでの忠実さは精神の硬直に等しいのだ。どんな状況にあつても、命令の遵守が至上なのだ。命令（規則）どおりにしか動かない硬直した没主体性。陸軍士官学校の命令（規則）至上主義は、生徒の自由意志を失わせてしまつてゐるのである。

彼等は、丸で何事もなかつたやうに澄まし返つて、つつばらかつたまま、くすりともいはない。

敵めしい出で立ちで「敵肅なる歩み」を進めていた教官が仰向けに引つ繰り返る図はおかしいであろう。他人の失策を見て笑うことは良くないことであろう。しかし、そういう倫理的判断に先立つて笑つてしまうのが人間としての自然な反応ではなからうか。

（その一）は、次のような後日譚で締め括られてゐるのである。

私は入校式当日のことを思ひ出して、一体、ああいふ時に、笑ひもしなければ、自分の足もとに転がつてゐる山高帽子を拾つてもくれない。現に見てゐるくせに、丸つきり知らぬ顔をしてゐるんだから、こちらは、しくじりの引込みがつかない。将校生徒といふものは、恐ろしく素つ気ないものだね、といつたら、その生徒は、お汁粉を頬張つてゐた箸を止めて、私を正視しながらいつた。「私共は、他人の失敗を見て笑ふのは、いけないことだと教はつてをります」

笑つてはいけない、と教えられているから笑わなかつたのだ、と生徒は言つてゐるのである。教えを守つたまでだ、命令されていることを忠実に遂行したただ、と言つてゐるわけである。しかし、笑つてはいけない、という教え（命令）を守ることは至難の業であらう。笑つてはいけない、と言われれば、余計におかしくなる、というのが人情というものではなからうか。陸軍士官学校の生徒はそのような人情を超越してゐるのである。教え（命令・規則）を完璧に守る訓練は、

自然な反応を自己に禁ずる訓練でもあるのだ。自然な反応を自己に禁じたロボットのような陸軍士官学校の生徒。

(その一)は、「私」の失策を鏡にして、陸軍士官学校の権威主義、形式主義を映しだしているのである。生徒の言動で締め括っているのはそのためだ。主題は陸軍士官学校の硬直した不気味さへの皮肉である。ブラック・ユーモアなのだ。

このような作品の背後には、当然のことながら、陸軍、陸軍士官学校に批判的であり、嫌悪感を抱いていた百閒がいるのである。『百鬼園日記帖』から、陸軍士官学校への嫌悪感・反発が記されている箇所を二、三抜き出してみよう。

早くむにやむにやがやめたい。「むにや」といふ言葉と字面がどんなに私の胸をわるくするか知れない。日記など書く時に、もう面倒で仕方がないから「学校へ行く」と書くけれども「学校」といふ字で「むにやむにや」を表はすのは何とも云へないむにやむにやである。「むにやむにや」は考へた丈でも厭だ。この、言葉の汚れから免れる為丈でも早く止めてしまひ度い。(大正六年十二月五日午過)

正午過士官学校で新校長の伺候式と云ふむにやむにやな式があつた。少少癪にもさはるからストープの傍で、まるでむにやむにやの関係ぢやないか。校長の方が新米なのだから向うで挨拶に来たらよからうと云つてやつたらさうは行かない。むにやむにやではむにやむにやは駄目だ、などと云ふ心配さうな声が二声三声した。(大正八年二月三日)

俸給の辞令を今朝渡すからフロツクコートを著て来いと云ふ。いつもの事だけれども馬鹿馬鹿しい。むにやむにやむにやむにやな考を持つてゐるからそんな事を平気で云ふのだらう。(大正八年七月十八日)

日記を『百鬼園日記帖』として出版する時、煩わしいことが起こるかも知れない箇所を「むにや」という語によつて伏せたのである。陸軍士官学校に対する嫌悪・反発の根底には、陸軍に対する生理的ともいえる嫌悪感があつたのだ。「もと

もと陸軍と云ふものは大きらひだつた」(「海老茶式部」、『馬は丸顔』朝日新聞社、昭40・10)のである。生理的嫌悪が根底にある批判・反発であるから強烈なのである。陸軍士官学校の権威主義・形式主義を批判し、嫌悪しているのである。

\*

(その二)は、軍人の学校で、(フロックコート)に(山高帽子)という出で立ちで派手に転倒するという点で、(その一)と相似形をなしているのである。しかし、テーマにおいても重なるであろうか。

その機関学校の視察といふのは、勿論表向きの名目で、実は去年の夏まで同僚だった先生方にもあひ、またそれまで教へてゐた生徒達の顔も見たかつたのである。

「私」は、視察を命じられたわけであるが、その「名目」を形骸化しているのである。命じられた重要任務を遂行しているのだ、と思ひ込むような硬直した精神の持ち主ではない。この柔軟な心は海軍兵学校をどのように映し出すのであろうか。

それにしても山高帽子は後ろに飛び、両手の手の平はすりむいてゐる位だから、玄関の受附に人がゐたら、顔ぐらゐは覗けさうなものだと思つた。

(中略)

私は玄関を上がつて、受附をのぞいて見た。すると中には、矢つ張り人はゐたのである。

玄関に来た人に、「来意」を言わせて、それに適切に対処するのが受附の職務である。「私」が「来意を告げる」と、受付はきちんと「私」を二階に案内するのである。玄関の受付は滑稽なまでに職務に忠実なのだ。自分に課された職務しか

しないという意味で。ロボットに等しいのだ。目の前で人が転んだ音がすれば、「顔ぐらる」は出すのが人間の自然な反応であろう。受付は、「私」を二階に案内はするが、一目瞭然の、「血がにじみ出して」、「二銭銅貨よりもつと大きく真赤になつ」ている傷については何の反応も示さないのである。自然な反応を喪失したロボットのようない受付を描き出しているのである。「私」が転ぶところを見たのに、笑いもしなければ、手助けしようともしない水兵の存在も描かれている。海軍兵学校も硬直しているのである。しかし、(その二)のテーマは兵学校の硬直に置かれているわけではない。

そもそも、「私」は、「去年の夏まで同僚だった先生方にもあひ、またそれまで教へてゐた生徒達の顔も見たかつた」から江田島までやって来たのである。(その一)の「私」が、「病篤き先生」の側を離れたくないのに、「さういふ儀式の八釜しい学校」であるため、止むなく、いわば反感を持つて出校したのとはわけが違うのである。(その二)の「私」は親愛感を持つて江田島に来ているのである。このような「私」の背後には、海軍機関学校に親愛感を抱いていた百閒がいるのだ。

さう云ふ人達の物腰には、きちんとした規律の裡に何かしら人を親しませるものがあつて、それが私などの様な部外の素人には、海軍と云ふものの一つの味はひである様に思はれるのである。(「海軍機関学校今昔」、「随筆新雨」小山書店、昭12・10)

ただ私は永年の間教師をして、いくつかの学校に関係したが、その中で機関学校が一番好きである。(中略)いい心持ちでいつ迄も行つてゐようと思つてゐるのに大地震が起こつて、その好きな学校へ行かれなくなつた。

だからつい江田島だの、新舞鶴だの、そんな遠くまで行つて見る気になるのだらう。(「山むらさきに」)

「海軍機関学校今昔」、「山むらさきに」も、「フロツクコート」と同じく百閒の作品である。しかし、虚構化の度合いは同じではない。前者はいわゆる随筆であり、後者は小説的な作品である。「海軍機関学校今昔」、「山むらさきに」に描かれ

ている海軍機関学校への親愛感は百閒の真情である。(その二の「私」には、百閒のこのような親愛感が投射されているのである。海軍機関学校が同居している海軍兵学校への出張を描いた作品において、兵学校の硬直が主題にならない所以である。

私は宮島から、モーターボートを仕立てて江田島に向かった。どういふ料簡で、そんな馬鹿なことをしたのだから。

オーソドックスでない行き方を選ばなければならぬ必然性はどこにもないのである。状況から強制されてもいないのに、気紛れに、その行き方を選んだのである。その結果、「恐ろしく高い料金を取られ」、おまけに、「何度ひっくり返りさうになつたか知れない」という危機に遭遇し、挙げ句の果てに、「塵芥捨て場のやうな石垣の間」に着くのだ。必然性のないことを気紛れにした挙げ句に無様な失敗をする、これが(その二)の「私」の行動パターンである。

門番に「身分や用件」を言いさえすれば通してもらえるのに、「フロックコートに山高帽子で威容を整へ」るのである。敵めしい出で立ちには、状況から強制されたものではなくて、「私」の気紛れの産物なのである。表現主体の手の内は次のやうに解説出来るであらう。「塵芥捨て場のやうな石垣の間」から上がり、「そのそと勝手を知らない庭を歩」く「私」を描くために、「私」に敵めしい出で立ちをさせているのだ。「私」の無様さを強調するために、「私」に「威容を整へ」させているのである。落差の大きさによる笑いをねらっているのである。

私が、うなづいて歩き出すと、水兵は敬礼をした。さうして、私は威張つたままの步調で、教はつた通りに行くと、広い芝生の向うに、大きな白い石造の建物が見え出した。廃墟のやうな東京から出て来て眺めた目には、丸でお伽噺の国の殿堂のやうに思はれた。その建物の壮美な感じが私に乗り移つて、私は益偉いやうな心持になり、人つ子一人ゐない静まり返つた広場を闊歩して、堂堂たる玄関にかかり、一足踏み入れた時に、私はばたんと俯伏せに倒れて、

花崗石の階段で顎を打った。

「私」が「威張つたままの歩調」で歩かなければならぬ理由はどこにもない。転ぶ「私」を描き、そのおかしさを強調するために、「私」は「威張つたままの歩調」で歩かされているのである。「私」は、落差の力学、テーマである笑いのために、「威張つたままの歩調」で歩かされたり、転ばされたりしているに過ぎない。作者の手の内が透けて見えるのである。「私」は作者の操り人形に墮しているのだ。

「私」がやって来たのは日曜日であった、という落ちまで用意されているのである。しかも、受付の「気の毒さうな顔」を書き添えて、「私」の間抜けさを強調することを忘れずに。

柄にもなく気紛れに敵めしく振る舞つたためにおかした失敗のおかしさ、「私」がどじを踏むおかしさ、「私」の独り相撲のおかしさ、これが（その二）のテーマである。軽く、明るい笑いである。